

■ オープニングセッション ■

---

# 漢族・少数民族研究の接合

クロスオーバー的視点からみる漢族と少数民族の社会と文化



開会挨拶

加々美光行

司 会

高 明 潔

.....  
2006年7月15日

●高— みなさん、こんにちは。今回のシンポジウム開催のため、皆様にお集まりいただき、とても光栄に思います。ありがとうございます。本シンポジウムの開催趣旨は予稿集に掲載してありますが、それに基づいて議論を展開し、新たな問題提起をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。それでは早速、開会させていただきます。

まず、愛知大学国際中国学研究センター所長 加々美光行先生より、挨拶をお願いいたします。



●加々美— ものすごく暑いなかを、わざわざ足をお運びいただき、責任者として深く感謝申し上げます。

国際中国学研究センターは、ご存じのように文部科学省のCOEとして2002年10月から始まりまして、来年3月で取りあえず最終期の締めになります。ポストCOEを申請するつもりでおりますけれども、まだ継続できるかどうかわかりません。ただ、センターそのものは存続いたしますので、今後もよろしくお願いいたします。

今年は最終年度ということもございまして、いろいろなテーマについて研究会内の国際シンポジウムもいくつか開催しております。そのなかで、このシンポジウムのテーマは高明潔さんのアイデアが選ばれたのですが、私は高さんと一緒に「内モンゴルの総合的研究」という著述をやっておりますので、発想がよくわかります。

ICCSとしては昨年4月に、ニューヨーク州立大学のUradyn Bulagというモンゴル人の政治人類学の研究者をお呼びしました。私が知り合いなものですからお呼びしたのですが、そのときたいへん虚を突かれたというか、非常に印象的な発言をBulagさんからいただきました。

私はBulagさんに、「少数民族の視点からする中国学の可能性について」ということで報告をお願いしたわけです。そうしましたら報告の冒頭で、「内モンゴルには中国学というものはない。それは何も内モンゴルだけではない。チベットにおいても中国学というものはない。新疆ウイグルにも同じように中国学というものはない。つまり、チベットにあるのは藏学、チベット学、モンゴルにあるのはモンゴル学といったように、それぞれの民族が自己の民族を学問的に追求する試みはなされていけれども、では中国という世界そのものを対象とするような学問は、実はなかったのだ」とおっしゃったのです。

さらに驚くことは、内モンゴルだけではなく国境を接するモンゴル国でも、中国学つまり中国に関する研究論文が年間で20数編しかなく、しかもそれは中国学と言えるほどのものではないと言うのです。だから、「加々美先生から要求された内モンゴルの視点からみた中国学というのは、自分としてはどうお答えしていいかわからない」という発言があったのです。

それは実に本心を語っていることでありまして、マイノリティーの民族が、自己の民族を含ませた意味での中国全体を考察の対象とすることがないということが、いったい何を意味するのか。このICCS、COEもそうですけれども、国際中国学という新たな中国学の統一した枠組みを生み出そうとしているものですから、その点でたいへんショッキングな経験でした。

その意味では今日、「クロスオーバー的視点からみる漢族と少数民族の社会と文化」ということで、クロスオーバーという方法をとることが、はたしてBulagさんが語った問題状況に対して別の可能性を提示できるのかどうか。つまり、Bulagさんは最初から最後まで、内モンゴル人からみた中国学の可能性ということについては、否定的な指摘をされたのです。ですから、私は別の可能性があ

るのかということを知りたいと思ひ、今日もぜひいろいろな方々のお話をうかがいたいと思ひているわけだ。

お忙しいなかを、ご面倒なレジュメ作成の作業をしていただき、かつお寄せいただき、そのおかげで私もみなさんのいろいろな考え方を事前にしっかりと拝見することができましたし、討論もほかの方々の意見を充分からませながら、お話しいただけるものと期待しております。ぜひ、この国際シンポジウムが実り豊かな成果を得られるようお祈りして、私の話を終えたいと思ひます。どうもありがとうございました。